

# 目次

## 序 章 「被爆二世」との出会い

ある少女の苦悩／「被爆二世」とは？／揺れる遺伝的影響への評価／  
「俺は書けない」と言った元上司／「ヒロシマの何を知ってるんだ」／  
「灰色」に逃げた／私に通ずる当事者の「戸惑い」

## 第一章 調査される子どもたち

「赤ん坊の遺体を渡してください」／語る言葉をもたなかった犠牲者たち／  
新生児七万人を調べたABC／被爆地の母に配られたパンフレット／  
長期に調査をする狙い／「血がもつたいたい」拒む親たち／  
忘れられないサンドイッチの味／家族の原爆体験を追う／  
開示されたカルテ、移ろう心／遺伝的影響への関心／  
うむか、うまざるか——迫られる決断／「子どもはもたない」夫婦の約束

## 第二章

### 「寝た子」を起こすな

相次ぐ「被爆二世の死」／親世代による子どもを守る動き／

そっとしておいたほうがいい？／「私の命も、いつか終わりになるのかな」／

被爆者の子どもか、被爆二世か／生きた歴史をつなぐため／

「ショックを与える」——拒絶する広島市長／

「ある」「ない」の議論を超えて／自治体独自の医療保障

## 第三章

### 立ち上がる被爆二世たち

なぜ求めて「被爆」の中に飛び込むのか／

運動の萌芽——誇りある青春のために／被爆二世宣言／

広がり始める「二世の会」／「反差別」の大阪で／

時間がない、その焦りの中で／とにかく仲間を探したい／

自分たちの健康を自分たちで守る／「遺伝の問題には触れるな」／

「絶滅させる方法はないか」——ある都議の発言／

## 第四章

### 調査と援護のはざま

ぼくは生まれてきてはいけなかったのかしら／原爆と優生思想／  
新潟水俣病「妊娠規制」との類似性／差別を支えた社会構造／  
「差別する私」と出会いなおす／偏見と差別の違いを踏まえて／  
被爆二世は「絶滅」発言にどう向き合ったか／「私は健康です」への違和感／  
援護が差別を解消する／「生きてきてよかった」と思うために

「不可解」な国の計画発表／健康診断は「調査研究」のため／  
割れる考え／真冬のハンガーストライキ／  
「幻」となった報告書／月に一度の会合で／  
取材の難航と反発心／「みんなこの問題から逃げていく」／  
職場で広がる運動／「継承」への期待／  
ヒバクシャとしての役割を／幼なじみを白血病で失い／  
放影研との議論の末に／厚生省の基本方針

## 第五章 永遠に続く平行線、それならば

195

初めての司法判断／裁判をしなければ変わらない国／歴史を積み上げた先に／

「究極の個人情報」ゲノム解析の時代へ／遺伝情報の総体に迫る／

被爆者は「研究協力者」——変わる放影研／「明快な答え」への期待／

ゲノム解析調査が抱える限界／「多様性を受け入れる」、でいいのか／

「結論は出ない」、ならばなぜ？／六ページに及ぶ要請書、厚労省の回答

## 終章 トンネルを抜けるために

231

命を絶とうと思った少女は、今／「私はかわいそうな子じゃない」／

受け止める、でも「被害者」に留まらない／「差別する私たち」で語り合う

## おわりに

245

## 参考文献

250

- ・本文中の肩書き・組織の名称などは、基本的に当時のものです。
- ・引用文中のルビ、傍点、「」内の註釈は筆者によるものです。
- ・被爆者及び被爆二世に対する差別表現があります。

## はじめに

被爆二世への差別を自覚することから、私の取材は始まった。

あれは、新聞記者になってから四年目、二〇二〇年の秋だった。

広島支局に配属されていた私は、一九四五年八月六日、米軍が投下した原子爆弾に関する記事を担当していた。「あの日」からほぼ半世紀後の一九九四年に生まれた私が入り組むにはあまりに重く、長い歴史のあるテーマだ。しかし、「知らない」からこそ知リたかったし、伝えられることがあると思っていた。

仕事を終えて帰宅すると、プライベートの時間にも資料をめくる日々。原水爆禁止運動の歩み、被爆者たちの証言……学ぶべきことはたくさんあった。文献に目を通しつつ、一日の取材を振り返ることを日課としていた。

その日に思い出したのは、喫茶店で二、三時間話し込んだ「被爆二世」の男性のこと。彼は、被爆者の子どもにも原爆の影響がありうると考え、広島で被爆した父のもとに生まれた自分も、

病弱なのだと訴えていた。体質の改善や免疫力の向上に効果があるという数種類のサプリメントをもち歩き、健康管理には人一倍気を遣っている。

その姿を思い浮かべながら、ふと思う。

「私は被爆二世と結婚して、子どもをもつことができるかな……」

消極的に感じている自分がいた。それは、その子どもに何かしらの「影響」があるのではないかという、漠然とした不安を抱いたためだった。

突然顔を出した感情に驚き、慌てて打ち消す。しかし、心の中がざわざわしていた。

「被爆二世」とは、母親、父親、またはその両方が被爆者で、その子どもとして生まれた人たちのことだ。二〇二六年六月現在、最も年齢が高い人で八〇歳とされるが、その人数や実態はわからない。

平和運動や被爆体験の伝承を引き継ぐ担い手として期待されることが多い一方で、原爆の遺伝的影響へのおそれから、差別の対象とされてきた歴史もある。「原爆症は遺伝する」「病弱な子どもが生まれる」「本人も長生きできない」——確証なくそうささやかれる中で、結婚や就職の場面で拒絶される経験をした人も少なくない。

その歴史と、不安を抱いた私が重なり合う。

当時私は二〇代半ばで、結婚や出産といった話題が身近になりつつあった。被爆二世という

テーマに自分を引き付けて考えてみた時、ためらう気持ちがあったのだ。

大阪に生まれ、親族に被爆者はいない。それでも私なりに原爆と向き合いたくて、広島で記者を続けてきた。被爆二世への取材も、重要だと考えてきた。彼らは、核兵器廃絶に並々ならぬ思いをもつ被爆者に最も近い。被爆二世は、すでに他界してしまったり、高齢や病気で語れなくなったりした被爆者の思いも代弁する。被爆体験を後世に語り継ぐ上でも大切な存在だと思っていた。

それにもかかわらず、実際には彼らを差別していたのかもしれない。一人、部屋の中でうろたえた。

喫茶店で向かい合っていた男性は、神奈川県川崎市に暮らす森川聖詩さん。二〇二〇年秋に出会った彼は当初から、被爆二世に対する〈援護〉の必要性を語っていた。

「私は、被爆二世も原爆被害者だと思っています。それなのに、私たちへの援護はずっと置き去りにされてきました」

森川さんの父・定實<sup>さだみ</sup>さんは一九四五年八月六日、爆心地から約一キロ離れた広島中央放送局（現・NHK広島放送局。当時の所在地は、現在の広島市中区<sup>のぼりちやう</sup>幟町）で被爆した。定實さんは転居した川崎市で被爆者の会を設立し、市独自の被爆者援護施策も実現させた。森川さん自身も、一

九七〇年代後半から被爆二世への保障を求める運動を始めた。運動から離れた時期はあったものの、五〇歳を過ぎてから活動を再開している。

彼の言う援護とは、被爆者と同様の医療や各種手当を、被爆二世にも給付することである。

このことを求める被爆二世は森川さんだけに留まらず、同趣旨を訴える裁判も行われてきた。

原爆放射線による遺伝的な影響を確信する森川さん。自身や仲間が抱える病気や健康への不安を明かした上で、「だから被爆二世も援護するべきなんです」と、聞かせてくれた。

親の被ばくによる子どもへの健康影響について、科学的知見は確立していない。だが、遺伝的影響への懸念から、被爆者やその子ども（二世）が差別を受けてきた経緯も、私は知っていた。

被爆二世への援護を求めることは、私が抱いたような不安を拡大させることにならないのだろうか？ 被爆二世への援護施策を実現させることで、「やっぱり被爆二世には何かしらの影響が出るんだ」との意識が広がり、差別を助長することにならないか。

森川さんとの出会いを機に、私は頭を悩ませるようになっていた。そして頭に浮かんできたのが、「私は被爆二世と結婚し、子どもをもつことができるだろうか」という冒頭の思いだった。

どのようにこの問題と向き合い、書いていけばいいのだろう。

取材を進めてみると、到底ひとくくりにすることはできない、多様な「被爆二世」の声と出会った。

「子どもに影響があるわけじゃないじゃん」

あっけらかんと笑う人がいた。

「自分はいたって健康に、幸せに暮らしているし……」

被害者として見られることに嫌悪感を示す人もいた。

「親と同じ病気に苦しんできた。間違いなく二世にも影響がある」

そう確信し、実名で語ることはいとわない人もいる。

記者の先輩や学者に相談すると、「二世は難しいよ」と顔をしかめられた。

被爆二世の当事者でさえ、「影響があると言っても怒られる、ないと言っても怒られる……

だから、この問題は難しい」と、表情を曇らせた。

日米共同で運営される放射線影響研究所は、遺伝的影響の解明に向けて、二〇二五年末からゲノム解析に乗り出した。「究極の個人情報」を扱うことになるため、社会的・倫理的な影響も踏まえて慎重に準備が進められてきたが、外部諮問委員会では「差別につながるような結果が出た場合、非公開という選択肢もあるのでは」という意見も出た。

それまで私が続けてきた「原爆報道」は、反核や継承というキーワードのもと、出会う人々  
と想いを重ねられるような感覚があった。しかし、被爆二世の場合は違う。「これを伝えてい  
くべきだ」という、「正解」がなかなか見つからなかったのだ。

これは私の手に負えない。取材から手を引こうとした時、電話越しに森川さんからこう言わ  
れた。

「学者も活動家もジャーナリストも、みんなこの問題から逃げていく」

その声は震えていて、泣いているのかもしれない、と思った。

被爆二世として――被爆者の子どもとして生まれるとは、どういうことなのだろうか。「平  
和運動や被爆体験伝承の担い手」に留まらない意味が、そこにあると思った。

彼らは「原爆被害者」なのだろうか？

被爆者の子どもとして生まれ、何に悩んで生きてきたのだろう。または、悩まなかったのだ  
ろうか。

触れることで、差別が広がってしまふとしたら？

そっとしておいてほしい、という声も聞こえてくる。

触れない方がいい問題なのか。

忘れてしまふべきなのか。

原爆投下から、すでに八〇年が経過した。

「核の時代」が幕を開けてから、それだけの年月が過ぎ去ったことをも意味している。核抑止論は影響力を強め、核使用のリスクも高まる一方だ。地球上で実施された核実験は二〇〇〇回超。「原子力の平和利用」に目を向けてみても、事故や労働による被ばくが後を絶たない。核をめぐるすべての過程で「ヒバクシャ」はうみ出されており、当然、それに連なる子孫がいる。被爆二世というテーマはもはや、全人類的な課題といえる。そうであるにもかかわらず、彼らの周辺に広がる葛藤や不安は、十分に見つめられてきただろうか。

彼らは原爆被害者なのか。

その問いは、「差別を引き起こしてはならない」「寝た子を起こしてはかわいそうだ」という善意と結び付き、率直に語り合うことをためらわせる。科学的な結論を待つべきだという意見もあるだろう。難解な問題を避けたいという感情も浮かんでくる。

ややこしそうだが、触れないでおこう――。

そう感じた時点で、私たちはすでにこのテーマと無関係ではいられない。誰かを差別する心や、優生思想につながりかねない感情が、その心奥には潜んでいるからだ。

被爆者だけでなく、被爆二世の高齢化も進んでいる。私が二〇二〇年にこのテーマと出合っ

てから、取材させていただいた三人がこの世を去った。

私自身は、「被爆二世」と呼ばれる被爆者の孫が、年齢的には近い世代だ。今や「四世」「五世」さえ誕生している。

被爆者の子孫として生まれるとは、どういうことなのか。当事者の語りに耳を傾けながら、その問いを考えたい。あわせて、被爆二世をめぐる「戦後史」をたどり、社会が彼らといかに向き合ってきたのかを見つめていく。

それは、「原爆被害」が及んだ範囲を、地域という〈横軸〉だけでなく、世代という〈縦軸〉から捉えなおす試みにもなるだろう。

被爆二世は原爆被害者か。

この問いから目をそらしている限り、原子力を含む核がもたらすものの全体像は見えてこない。

本書は、「差別する私」と向き合いながら、被爆二世の戦後をたどったノンフィクションである。被爆二世というテーマは、私が私として生きていくための気付きをも与えてくれた。その奥行きを感じながら、それぞれの答えに出合ってほしい。